

4

災害派遣の現場から



スリランカのインド洋大津波被災地にて

4.1 トルコ北西部大地震（8月17日発災）

発災後11日目～

派遣期間：平成11（1999）年8月27日～9月9日
10月26日～11月6日
（事務局職員各1名）

(1) 主な活動概要

- （1次）イスタンブール・イズミット・バンジュルマ
- （2次）ギョルジュク・イズミット・アドバザリ・アンカラの被災状況視察、警察・医師・行政関係者・住民・学校の教職員・子どもたちとの被災状況の聞き取りや地震対応についての意見交換、イスタンブール・アンカラでの震災復興支援セミナーの開催、日本大使館・トルコ政府への報告

(2) 現地で聞かれたこと

- ① 学校再開のメドや方法について
- ② 学校再開時の生徒への対応について
- ③ 余震が発生した場合の避難方法について
- ④ 日本の防災教育の現状について

(3) 伝えてきたこと

- ① 被災した子どもたちに対する心のケアの必要性
- ② 被災した子どもたちへの支援体制の充実
- ③ 教育活動の再開に向けた環境条件の整備（校舎の安全性、子どもの状況、指導者の確保、学習場所の確保、教育委員会などとの連携）

(4) 伝え切れなかったこと

ボランティア教育の必要性（復旧活動が軍主導）

(5) 現地で学んだこと、その他

- ① 被災体験から学んだことを広く世界に伝えていくことの大切さ
- ② 子どもたちや教職員の心の健康問題に対する支援や研修の必要性
- ③ 相手の国の文化や風土を理解した上で防災教育を進めていくことの大切さ

4.2 集集大地震（台湾）（9月21日発災）

発災後41日目～

派遣期間：平成11（1999）年11月1日～12日
平成11（1999）年12月1日
～平成12（2000）年3月31日
（復興担当教員各1名）

(1) 主な活動概要

集集大地震で、被災・倒壊した台中日本人学校（小中併設）へ児童・生徒、教師、保護者の心のケアのため文部省（今の文部科学省）より派遣

- ① 「自分を知ろうチェックリスト」による児童・生徒、教師の実態調査
- ② カウンセリングとリラクゼーション
- ③ 保護者面談と保護者の自助活動支援
- ④ 「何でも相談ボックス」による相談活動
- ⑤ 心のケア活動に関するアンケート

(2) 現地で聞かれたこと

- ① 震災ではどのようなストレスが出て、教職員・保護者はどう対応したらいいのか
- ② PTSDにならないためには、どう対応するのか
- ③ 阪神・淡路大震災から5年後の子どもたちのようす

(3) 伝えてきたこと

- ① 大災害後に、心が不安定になるのは誰にもあること。安心・安全感を与えてほしい。早期の学校再開は子どもたちを安心させる
- ② 子どもをよく観察し、無理をしないで気持ちを吐き出させてほしい

(4) 伝え切れなかったこと

- ① 日頃から教育相談ができる体制をどうするのか
- ② 震災をまだ受け入れられない保護者への対応

(5) 現地で学んだこと、その他

- ① 災害に対する国民性に違い
- ② 日本語の話せない保護者への現地の臨床心理士の必要性
- ③ 子どもたちへの心のケアの重要性
- ④ 日本人学校における、災害時学校の果たす役割の重要性

4.3 北海道有珠山噴火（3月31日発災）

発災後5日目～ 初めてのEARTH員派遣

派遣期間：平成12（2000）年4月4日～6日
（EARTH員3名）

(1) 主な活動概要

- ① 北海道教育庁との意見交換
- ② 道立虻田高校、道立豊浦高校の学校長及び教職員との意見交換
- ③ 避難所となっている施設の訪問
- ④ 道立伊達高校、道立高等養護学校の学校長及び教職員との意見交換

(2) 現地で聞かれたこと

- ① 学校の避難所運営、心のケア対策、学校の早期再開手順
- ② 生徒安否確認方法、教科書・学用品などの教育助成など
- ③ 学校教育の実施と避難者の生活
- ④ 避難者の受け入れ態勢

(3) 伝えてきたこと

- ① 学校の早期再開方法
- ② 避難所の運営方法
- ③ 心のケアの今後の対策

(4) 伝え切れなかったこと

- ① 避難所の閉所方法
- ② ボランティアのコーディネート

(5) 現地で学んだこと、その他

- ① 被災地が道庁より離れているため実態の把握が難しい
- ② EARTHによる長期的・継続的な支援が必要
- ③ EARTH員の派遣の方法



被災現地校での意見交換の様子

4.4 鳥取県西部地震（10月6日発災）

発災後6日目～

派遣期間：平成12（2000）年10月11日～13日
（EARTH員4名）

(1) 主な活動概要

- ① 被災した学校への助言
- ② 避難所となっている学校の運営についての助言
- ③ 西部教育事務所への助言

(2) 伝えてきたこと

- ① 学校は安全で安心できる所であるということを踏まえて日頃の教育活動で地域と関わるのが大切
- ② 「大丈夫だよ」「あなただけじゃないんだよ」と寄り添って不安を除いていく。肩を抱いてやることも有効であるし、何も言わず側にいるだけでもいい
- ③ 自分の体験を整理し、きちんと自分のものとしておく記憶の再構成が大切。作文などで表現させるのもいい
- ④ PTSDの子どもに対しては、みんなと一緒に頑張ろうと励まし、専門家にかかるのがいい
- ⑤ 教職員自身の心のケアの必要性について
- ⑥ 避難所運営について
 - ・阪神・淡路大震災の時は、市の職員の対応についても地域の避難者から不満が出たが、学校の先生が中に入ると混乱が避けられたことが多かった。

(3) 伝え切れなかったこと

- ① 臨床心理士・スクールカウンセラーと連携
- ② 教職員への指導とその対応
- ③ ボランティアの不足とその対応

(4) 現地で学んだこと、その他

- ① 兵庫の「新たな防災教育」をさらに深めていき、全国に発信していくことの重要性を改めて実感した
- ② 臨床心理士・スクールカウンセラーとの連携が不足しているから、災害発生後の時期だけでも被災地に集中できるように教育委員会に依頼した
- ③ ボランティアの不足も実感した。マスコミを通じて被災地の様子を全国に訴えていくことも必要である

4.5 宮城県北部連続地震（7月26日発災）

発災後 5 日目～

派遣期間：平成15（2003）年7月30日～8月1日
（EARTH 員 2 名）

(1) 主な活動概要

- ① 被災状況及び活動内容の確認
- ② 避難所となった小中学校への支援内容調査
- ③ 子どもたちの状況調査、報告及び懇談

(2) 現地で聞かれたこと

- ① 夏休み明けの子どもたちへの対応（主に心のケア）
- ② 宮城県沖地震に対する備え

(3) 伝えてきたこと

- ① 夏休み中であるが、アンケートなどで子どもの心の様子を掴む必要がある
- ② 地震を鮮明に記憶しており、怖がる子どももいる
- ③ 今後の対応については、専門家と連携しながら教職員や保護者が一緒に取り組む必要がある
- ④ 8月下旬の研修会に EARTH から講師を派遣することも可能
- ⑤ 子どもたちに色々な変化が起こってくるだろうが、「普通でないことが起こったのだから、普通でなくなるのが、普通なんだ。」ととらえ、教職員・保護者・地域住民が支えていって欲しい

(4) 伝え切れなかったこと

- ① 子どもたち一人ひとりに対応した心のケアの具体的なあり方

(5) 現地で学んだこと、その他

- ① 兵庫の経験や失敗の事例をどう伝え、子どもたちが早く元気を取り戻す支援をどうすすめるか
（8月20日の「心のケア」研修会に講師として参加し、事例などは可能な限り伝えられた。）

4.6 台風第23号による但馬の水害（10月20日発災）

発災後 2 日目～

派遣期間：平成16（2004）年10月21日～29日
（EARTH 員29名）

(1) 主な活動概要

- ① 避難者の受け入れ及び名簿の作成
- ② 配給物資の受け取り及び避難者への配給
- ③ 夜間の来客や電話への対応及び見回り
- ④ 避難所生活ルールの再検討

(2) 現地で聞かれたこと

- ① 学校の再開に向けて
- ② 心のケアについて
- ③ 避難所の運営について

(3) 伝えてきたこと

- ① 学校教育支援
 - ・学校再開に向けての支援、アドバイス
 - ・通学路の安全確認（危険箇所の再確認）
 - ・学校再開に向けて避難者の教室移動計画
- ② 心のケア支援
 - ・「災害時における心のケアの基本理解と具体的対応の方法について」の資料を作成し、研修を行う。
 - ・1ヵ月間のプログラムを提示、PTSD の理解と対応についての研修会の開催する。
 - ・避難所の子どもたちへの心のケアに努める。
- ③ 食に関する支援
 - ・配給物資の受け取り及び配給、請求
 - ・食料の搬入と搬出

(4) 伝えきれなかったこと

- ・避難所の自治についての手立て
- ・学校再開までの手順（学校側で対応できていた）
- ・避難所運営委員会を設けなかったが、避難所が長期になる場合は必要である。

(5) 現地で学んだこと、その他

- EARTH として引継ぎをしっかりとするために、「EARTH 引継ぎ書」のようなものが必要である。
- EARTH 員は、初動の時に関わることができない。そのため、現地の状況を冷静に判断し、現地のやり方に添って助言することが大切だと思った。
- 災害弱者（老人、子ども、障害者など）への配慮をまず考えたい。
- 学校職員、EARTH 員、行政の方との役割分担をした方がスムーズに仕事が進むことがある。
- 訓練・研修が水害では活かされないことがあった。
- EARTH 員との連絡調整としての現場での事務局が不可欠である。
- 自動車、携帯電話、デジカメなど装備も必要である。



台風第23号による水害で学校が孤立した
出石町立小坂小学校（当時）

4.7 新潟中越地震（10月23日発災）

発災後4日目～

派遣期間：平成16（2004）年10月26日～28日
（先行調査：EARTH員3名）
平成16（2004）年11月1日～7日
（本派遣：EARTH員6名）

(1) 主な活動概要

- ① 先行調査
 - ・新潟県長岡市・小千谷市・十日町市における避難所の状況把握、情報収集、調査結果の報告・懇談
- ② 本派遣
 - ・支援内容の確認、避難所の児童生徒の健康観察及び学習支援、保護者からの事情聴取、学校再開に向けての取組の支援、教職員への指導、活動報告・懇談

(2) 現地で聞かれたこと

- ① 間借りで学校再開するときの留意点
- ② 心のケアの進め方
- ③ 子どもや保護者への支援
- ④ 被害の違いに対する配慮
- ⑤ 学校再開後の子どもへの指導
- ⑥ 震災学習について
- ⑦ 高校入試や授業の遅れへの対応
- ⑧ 教育条件整備

(3) 伝えてきたこと

- ① 間借りによる学校再開については、お互いの教育の良さを認め合うことが大切
- ② 再開後の教育では、楽しい行事も取り入れ、学校が元に戻っていると感じさせて、安心感を持たせたい。また、命が助かったことを素直に喜び、共感することを基盤にして、教職員と子どもが一体となって新たな学校の歴史を作り上げてほしい。条件整備などは要求すべき
- ② 心のケアは、子どもの様子を見ながら、適宜行うとよい。避難所での健康観察はすでに心のケアとなっている。どん

なことも受け止める姿勢が大切。保護者とも話を聞く機会を多く持つ。でも、教員が答えを出そうとしない方がよい。転校した子にも情報を

- ③ 長期的な取組になるので、教職員の休養や気分転換も大切に

(4) 伝え切れなかったこと

- ① 教職員の避難所支援活動のあり方
- ② 被災した学校への人的支援、条件整備のあり方
- ③ 被災した学校を受け入れる学校の教職員などへの助言

(5) 現地で学んだこと、その他

- ① 阪神・淡路の教訓は随所に生きていた。我々の支援も助言でなく、失敗したことを伝え、参考にしてもらおう姿勢がよい
- ② 資機材を充実させ、ネットワーク型の支援が有効
(新潟へはノート PC を 3 台持参し、兵庫県教育委員会とも連絡を密に取りながら、活動を展開した。また、派遣 EARTH 員が携帯電話を所持し、分散して活動する際、相互の連絡を密にした)



新潟中越地震による被災地支援で災害対策本部に入る EARTH 員

4.8 スマトラ島沖地震によるインド洋大津波（12月26日発災）

発災後138日目～ スリランカ、バンダアチェ、バンコクへ

派遣期間：第1次 平成17(2005)年5月12日～16日
(EARTH員2名)

第2次 平成17(2005)年6月18日～30日
(EARTH員4名)

第3次 平成17(2005)年7月21日～29日
(EARTH員4名)

第4次 平成17(2005)年11月28日～12月2日
(EARTH員4名)

(1) 主な活動概要

津波トラウマカウンセリングプロジェクトへの支援

第1段階 現地調査と研修プログラムの企画

第2段階 30人の選ばれたスクールカウンセラーや先生
へのトレーニング

第3段階 2段階でトレーニングを受けた30人が各地で
それぞれ200人のトレーナーを養成

このうち第1・2段階を支援

(2) 伝えてきたこと

- ① 災害後に子どもたちの心はどのような状態になるのか。
- ② 災害後の子どもたちの反応に対する支援の仕方
キーワードは「安心・絆・表現」
 - ・セルフカウンセリング
 - ・ストレスマネジメント
 - ・メンタルサポート
- ③ 避難所での教師の役割
- ④ 学校でしなければならないこと
(心のケア・防災教育)

(3) 伝え切れなかったこと

- ① 大きな被害を受けている先生がしなければならないカウンセリングの難しさ
- ② 宗教から起こる災害の原因やカウンセリングに対する考え方

③ 学校での防災教育の実施に向けての方向性

(4) 現地で学んだこと、その他

- ① 被害の大きさ、死者の多さは想像を絶するので、復興には時間がかかる。そのための支援が必要である
- ② 民族の絡んだ内戦状態（現在は停戦中）が続いているので、復興には時間がかかりそうである
- ③ 教師の地位向上の必要性がある
- ④ アジアには瞑想など西洋社会に伝えるべきすばらしいセルフコントロールの手法がある
- ⑤ ストレスマネジメントが日常的に織り込まれることが大切である

(参考) 津波トラウマカウンセリングコースの概要

セッション 1	オリエンテーション
セッション 2	トラウマケアの基礎理論
セッション 3	自己紹介（災害体験）
セッション 4	セルフ・カウンセリングと相互メンタルサポート テクニック
セッション 5	カウンセリング講義と実践
セッション 6	ストレスマネジメント実践
セッション 7	自己紹介（災害体験）
セッション 8	プレイ・セラピー
セッション 9	防災教育
セッション10	ケーススタディ
セッション11	教室でのメンタルケア実践（絵画、作文）
セッション12	スクリーニング 心理教育
セッション13	ケーススタディ
セッション14	震災復興 兵庫からのレポート
セッション15	ディスカッション

(高橋 2005)